

聖職者と詩人—R.S. トマス：詩の翻訳—

佐野 博美

R.S. トマスは、以前も本学紀要（第10号）でも述べたように、聖職者であり、同時に優れた詩人でもある。彼が初期に書いた詩や散文から、もっぱらウェールズの田園や農民をテーマにした詩を書く詩人として理解されがちである。しかし彼の詩を実際に読んですぐに気付くことは、何よりも先ず神に呼びかける詩人の姿である。トマスの神に対する愛情の強さを、思わずにはいられない。それほど求めながら、決して姿を現してくれない神への嘆きがある。神を確信しながら、同時に絶望している人の姿がある。トマスの詩は常にその簡潔さに特徴がある。饒舌を避け、細心に贅肉を削ぎ取った言語とイメージを使用している。シンプルな語彙で淡々と語ってはいるが、それだけに、そこには優れた俳句にも似た、存在に対する究極の感受性があり、時にはユーモアさえも感じとることが出来る。聖職者として人に神を説きながら、一個の詩人として苦悩している様は、同じ人間としておおいに共感できるものである。

以下、そうしたトマスの詩を三篇紹介する。

私は偶々僧侶でもある。それ故、信仰共同体の形で人間と関わる事になる。こうした事の全てが、私の書く詩のあるものを構成する要素になり得る事は間違いない。

(“The Making of a Poem” in *R.S. Thomas Selected Prose*, p. 115.)

The Word

A pen appeared, and the god said :

'Write what it is to be
man.' And my hand hovered
long over the bare page,

until there, like footprints
of the lost traveller, letters
took shape on the page's
blankness, and I spelled out

the word 'lonely'. And my hand moved
to erase it ; but the voices
of all those waiting at life's
window cried out loud : 'It is true.'

言 葉

現れたのは一本のペン、神が言われた

「人の証を書いてみよ」

私の手はいつまでも

白紙の上に滞っていた

漸くページの空白から

道に迷う旅人の足跡にも似た

覚束ない文字が生まれ

私が綴り終えたのは

「^{ロンリー}独り」という言葉

そそくさと私の手がその言葉を消した

けれども、生命の窓辺に控える者達が

大声で口を揃えた—「そのとおり」

The Empty Church

They laid this stone trap
for him, enticing him with candles,
as though he would come like some huge moth
out of the darkness to beat there.
Ah, he had burned himself
before in the human flame
and escaped, leaving the reason
torn. He will not come any more

to our lure. Why, then, do I kneel still
striking my prayers on a stone
heart? Is it in hope one
of them will ignite yet and throw
on its illumined walls the shadow
of someone greater than I can understand?

空　ろ　な　教　会

人々はこの石の罫を築き
臘燭を点して神を誘った
あたかも、神は巨大な蛾に似て
闇から羽撃き入るかのように
ああ、かつて人の世の炎に
神は身を焼かれ
逃れて行かれた一人の義の乱れたままに—
もはや我等の誘いに

神が喜ばれることは無いであろう　なのになぜ、私は跪き
冷たい石の心臓に、祈りを打ちつけ続けるのか
何時かひとつの祈りが火を放ち
照し出された石壁に
人知も及ばぬ大いなる者の影を投じる
奇跡はあるのだろうか

The Absence

It is this great absence
that is like a presence, that compels
me to address it without hope
of a reply. It is a room I enter

from which someone has just
gone, the vestibule for the arrival
of one who has not yet come.
I modernise the anachronism

of my language, but he is no more here
than before. Genes and molecules
have no more power to call
him up than the incense of the Hebrews

at their altars. My equations fail
as my words do. What resource have I
other than the emptiness without him of my whole
being, a vacuum he may not abhor?

不 在

この大いなる不在こそ

神の似姿 真に迫るその力の故に

応答の希望もなく私は語りかける

私が訪ねる部屋は

空しく、今居た人の気配を残すのみ

それとも、まだ来ぬ人を待つ

控えの間か

旧式の言葉を新装しても

その不在は変らない

遺伝子だ分子だと言ってはみても

ヘブライ人の供える香と同様

その人は現れてはくれない

言葉は無能、方程式をたてても無駄なこと

神の居ないこの空しい実存

この空虚—神はそれがお望みか—

それだけが私の全て

〔使用したテキスト〕

- (1) R.S. Thomas, *Selected Prose*, edited by Sandra Anstey, Poetry Wales Press (Mid Glamorgan), 1986.
- (2) R.S. Thomas, *Poems of R.S. Thomas*, The University of Arkansas Press (Fayetteville), 1985.